

ヘーゲル推理論の存在論的視角と構造

竹村喜一郎

はじめに

周知の如く、カントがアリストテレス以来後退も前進もなかったことに論理学の完全さの証を見出し、論理学を賛えたのに対して、ヘーゲルは世界精神と学問の発達に応じた論理学の「全体的改訂」「改造」(GW11.22f, GW21.35f)の必要性を唱え、その「完全に変化した形態」(GW11.16, GW21.28)として自己の論理学を構築しようとした。そうした意図の表出として『論理の学』(Wissenschaft der Logik, 1811-16)序文における「世界の知的解釈の純粹形態は論理学でなければならぬ」(GW11.21, GW21.34)という一文は解される。それでは論理学の対象が伝統的な「思考と思考の規則」(GW11.16, GW21.28)から「世界」へと転換されることによって、論理学はどのような性格を獲得することになったのか。この問に対する答えの一端をヘーゲルの推理論のうちに探ることを本論の課題とする。推理論を主題とするのは、ヘーゲルが『論理の学』において推理 *Der Schluss* に理性和関連づけて枢要な位置を与えていることが、論理学が「純粹理性の体系」(GW11.21, GW21.34)と規定された上で、「推理は理性的なものであるだけでなく、あらゆる理性的なものは推理である」(GW12.90)と記されていることから看取されるからである。理性和推理との一体性という視角からは、ヘーゲルの論理学を「推理の体系」と置換することすら可能となるのである。

ところで、ヘーゲル推理論は、大多数の要約的、注釈的研究においては事象に即した取扱いを受けず、少数の批判的研究によってその伝統的論理学との異同が問題にされて来た。例えば、トレンデレンブルク、フォン・ディエルスブルクは、ヘーゲルの推理論を形式論学的には疑わしいものとみなし、これに対してクローンはヘーゲルの推理論と伝統的形式論理学との間に対立関係を認めず、前者を後者のうちに存立しうるものとし、またヘースレは、ヘーゲルが、アリストテレスに接近することによって、知っていたのは一個の述語のみで、パース、E・シュレーダーによって構築された関係論理学ではない、として、ヘーゲル推理論の時代遅れを指摘している。³ ここにはヘーゲル推理論とアリストテレスないしは伝統的形式論理学における推理論との異同認定およびそれに立脚するヘーゲル推理論の肯否の評価という二重の対立が認められる。こうした論議を手がかりに前掲の論理学改作の意図を踏まえて予めヘーゲル推理論の枠組を描出するなら、それは伝統的論理学における正しい思考の規則という了解を批判し、世界の自己表出・自己把握の形式という存在論的性格のものとなる。そうした試みが成功しているか否かはまた別の問題である。本論ではこうした視角から、ヘーゲルの推理論を、1 基本視角、2 定在 Dasein の推理論、3 反省 Reflexion の推理論、4 必然性 Notwendigkeit の推理論の順に検討し、最後に5 特質と意義を確認したい。

一 ヘーゲル推理論の基本視角とその意想

ヘーゲルは具体的な推理の諸形態を展開するに先立って自己の推理に対する視角を表明している。そこには内容的には、(1) 推理の本質、(2) 推理と理性との関係、(3) 理性と対象との関係、(4) 媒辞の意味に関する固有の見地が認められる。これらをアリストテレス以来の伝統的論理学との対決として説明しよう。

まず、ヘーゲルは推理論の冒頭において、自己の推理把握を端的に次のように規定している。

「推理は判断の中における概念の回復であり、したがって両者〔概念と判断〕の統一および真理である」(GW12.90)。

ここでヘーゲルが述べていることは、第一に概念においてはその諸契機すなわち普遍性、特殊性、個別性が統一の中で自立性を持たずに存在し、次いで、判断の中ではそれら諸契機が自立的な両項〔主語と述語〕として立てられたのに対して、推理においては概念の諸契機は自立的であるとともに統一性においてある、ということである。それゆえ推理は「完全に定立された概念」(ibid.)とも規定される。要する

に、普遍(A)、特殊(B)、個別(E)がそれぞれ白立して在りながら、同時に孤立性を有することなく一体であるという事態が推理だ、ということである。

だがこの推理の本質規定は何を意味しているのか。それはアリストテレスの推理把握に対する批判としてある。言うまでもなくアリストテレスにおいて推理 *sylogismos* は「あることどもが定立されると、これらとは異なつたあることが、これらを通じて必然的に出てくる論議である」と規定されている。「あることども」は前提をなす二命題を、「あること」は前提から導出される結論を意味している。ヘーゲルが推理を二つの命題あるいは判断から成るものとするアリストテレス流の見解を斥けていることは、次の記述から明らかである。

「このような分離された命題を通じて進行する推理活動は、主観的形式にすぎない。事物 *Sache* の本性は、事物の区別された諸々の概念規定が本質的な統一の中で結合されていることである。こうした理性性は、応急手段ではない。それはむしろ、判断の中にまだある関係の直接性に対して、客観的なものである。したがって、判断の認識の直接性が、どちらかといえばまだ主観的なものであるのに対して、推理は判断の真理なのである。——すべての物 *Alle Dinge* は推理であり、特殊性を介して個別性と結合された普遍的なものである。といっても、もちろんすべての物は二つの命題から成立する全体ではない」(GW12:95)。

ここに明らかなように、ヘーゲルはアリストテレス以来の推理形式およびその理解を主観的形式および形式的見解と断じ、推理すなわち普遍・特殊・個別の区別と統一を、客観的なもの、すなわちあらゆる事物に具わる一般的存在形式と捉えるのである。この意味において、ヘーゲルの推理論は存在論的性格のものなのである。

だが、このような推理規定は如何なる論拠に基づくのか。ヘーゲルが論拠としているのは推理と理性との関係把握にほかならない。すなわちヘーゲルは、悟性 *Verstand* において規定的な概念が独立した固定的なものと捉えられるのに対して、理性 *Vernunft* の中では規定的な諸概念が全体性と統一の中に置かれるが故に推理と理性的なものと同等性が成立することを強調した後、次のように言うからである。

「推理の作用は長期にわたって理性に帰せられている。しかし他面では理性そのものと、理性的な原則または法則とについて、推理を行なう前者の理性と、法則やその他の諸々の永遠の真理や絶対的思想の源泉である後者の理性とが互にどのように関連するのか、明らかでないと言われる。だが、前者が単に形式的な理性であるのに対して、後者が内容を産出すると言われるなら、こうした区別に従って後者に理

性の形式、すなわち推理が欠けることはできないはずである。それにもかかわらず、両者は互いに分離され、一方を論ずる場合には他方は考慮されないのが常である結果、絶対的思想たる理性は、いわば推理の理性であることを恥じ、従って推理はほとんどただ伝統的にのみ理性の一つの仕事とみられるにすぎないという有様である」(GW12.90)。

一読して明らかなように、ヘーゲルは推理を行う形式的理性と、内容を産出する理性あるいは、法則や永遠真理、絶対的思想の源泉である理性、言うなれば客観的に存在する理性との間の区別を認めつつ、後者を前者の源泉とするともに、後者自身前者と同じ形式を有するものと捉えるのである。

ここにもまたヘーゲルのアリストテレスに対する批判を認めることができる。なぜならアリストテレスにおける推理論は、「偽や真は事物 *pragma* のうちにあるのではなく、思考 *dianoia* のうちにある」^⑥という真理観を基盤とし、思考が言語に表現されたものとしての命題から構成されるものとして展開されているからである。アリストテレスが真を思考のうちにのみ求めたのに対し、ヘーゲルが事物のうちに真を求め、その表現として理性的形式を捉えることによって、ヘーゲルは自己の推理規定を構築したのである。

そしてこのような理性把握はまた理性と対象との認識的関係の把握とも連動することになる。すなわちヘーゲルにおいて論理的理性は推理活動を行なう、単に形式的な理性ないしは自己の認識能力の限界設定を試みる批判的理性ではなく、神、自由、無限なもの、無制的なもの、超感性的なもの、の内容を把握しうる理性として捉えられ、その理由が次のように与えられている。

「対象の無限なものは、有限なものの空虚な捨象でもなく、内容や規定を欠いた普遍性でもない。そうではなく、それは充実した普遍性であり、規定されながらかつその規定性を次のような真の仕方のみならずにおいてもつ概念なのである。すなわち概念は自分の中で自分を区別するとともに、この概念の悟性的で規定された区別の統一としてあるような仕方でもつのである。そのようにして今や理性は有限なもの、制約されたもの、感性的なもの、あるいはその他どのように規定されようとも、これらのものを超えて自分を高めるのであり、このような否定性のうちで、本質的に内容に満ちたものである」(GW12.91)。

一般的に無限なものと言われるものの内容をなすものが理性とされることによって、理性の自己把握の可能性が保証されている。そしてここでもまたアリストテレスの学的認識の捉え方に対するヘーゲルの批判を見ることができ、アリストテレスにおいて、学的認識

episteme は存在者の究極的原理 arche ないしは原因 aitia を求めるものであり、問われているものの「何であるか」に答えるものとされているが、これは主語となって述語とならないとされる「実体」ousia について述語するということにはかならない。したがって学識的認識は何であるかが問われている実体としての主語 S に、実体の属性をもつて述語 P とすることとされ、その際普遍的・必然的に答えられたその「何であるか」は、そのものの「本質」to ti en einai とされる。⁸⁾ 二つには、実体が、基体 hypokeimenon として述語とならないものと規定されることによって、内容や規定を欠くものと思念されると同時に、その本質とされるものが、「いかなるものにせよ、同一の事物に属することも属しないこともできるもの」、すなわちいわば偶然的性質とでも規定される属性 symbebekos である、という二重の意味での奇妙としか言いようがない理論構成が存する。ヘーゲルが理性と対象との関係として定立したのは、このような悖理に陥ることなく、対象そのものの内容の自己展開が対象自身の自己認識に至りうる方途であり、そうした理論の内容をなすのが推理として理性の構造なのである。

更にヘーゲル固有の推理の把握は、媒辞にも伝統的理解とは異なる意味を与えるにいたっている。ヘーゲルは推理の本質を媒辞に求めて次のように言うからである。

「推理の本質的なものは両項の統一であり、両項を結合する媒辞 Mitte および両項を支えている根拠である。けれども抽象は両項の自立性を堅持するから、抽象はこの統一をまた〔両項〕同様に向目的に存在する固定的な規定性として両項に対立させ、このような仕方での統一をむしろ非統一、すなわち統一ではないものとして捉えるのである」(GW1291)。

この引用の前半はアリストテレスと同じ媒辞観を表明しているかに見える。アリストテレスの学識的認識は「S は P である」という命題の形をとるが、その成立は S と P との結合を普遍・必然的たらしめる媒辞 M の存在に負うものとされ、それゆえ彼は M を「原因」と名づけ、M が真であるならば、その時成立するシユロギスモスは、真らしい前提に基づく推理としての弁証法とは異なる、論証法 apodeixis であるとしているからである。¹⁾

しかし、引用の後半部は、ヘーゲルがアリストテレス流の媒辞の捉え方を、真の媒辞の意味を見失った反省にすぎないと見ていることを示している。ヘーゲルが言おうとしていることは、M を介して S と P とが結合されると考えられる場合、S—M—P と表示されるどの項も自立的なものと捉えられ、両項を結合・統一する媒辞すらも、実際には両項とは異なる自立項になってしまふということである。その場

合、ヘーゲルの観点からは「非統一が推理の本質的な関係」(ebd.)とされてしまうのである。それではヘーゲル自身が捉える両項と媒辞の関係はどのように表示されるかと言えば、とりあえず表象的次元では、 $S \mid P$ 、すなわち S と P という二点と両者を結ぶ線そのものが M ということになる。無論これはあくまでも二次元上の比喩にすぎないが、今のところはこれにとどめておく。ともかくヘーゲルの推理論は根底にアリストテレス批判を握えているのであって、ヘーゲルのヘーゲル理解は斥けられなければならない。

では以上にみたヘーゲルの推理への基本的視角は、現実的にはどのような推理論となるのか。この問題に着手することにした。

二 定在の推理の構成理由と妥当性

ヘーゲルは概念諸規定が直接的で抽象的な形をとる最初の推論形式を「悟性の推理」(Verstandesschluss) (GW12:91) と名づけ、また「定在 Dasein の推理」(ebd.) とも呼んでいる。こうした名称で呼ばれる推理が通常の論理学におけるものであることは、それが「本来の形式的推理」(GW12:92) とも規定されているところから明らかである。ヘーゲルはこれを更に E (個別) — B (特殊) — A (普遍)、 $B \mid E \mid A$ 、 $E \mid A \mid B$ 、 $A \mid A \mid A$ という範式で表現される四つの格にまとめている。以下では定在の推理の展開のうちに伝統的論理学に対するヘーゲルの批判的論点を確認し、更にトレンデレンブルク等のヘーゲル批判との対質によって、ヘーゲルにおける伝統的論理学克服の構想を説明する。

(一) 定在の推理の四つの格とその問題点

a 第一格 $E \mid B \mid A$

ヘーゲルはこの第一格の形式について「 $E \mid B \mid A$ は規定された推理の一般的範式である」(GW12:93) と述べ、これが形式的推理の「根源的關係」「本質的形式」(GW12:94) とも言及。このことは、第二格以下の格がこの格に基づくかぎり妥当性を有すること、またそれらが第一格の変形にすぎないことを意味する (vgl. ebd.)。そしてこの第一格の成立理由が、個別は特殊のもとに包摂され、特殊はまた普遍の下に包摂される、従って個別もまた普遍の下に包摂される、と説明されるかぎり (vgl. ebd.)、第一格が伝統的形式論理学の第一格に相当

することは、次の表式から明らかである¹²⁾（下段では結論の述語となる大概念をP、媒概念をM、結論の主語になる小概念をSで表わす）。

B—A	
E—B	
E—A	
<hr/>	
M—P	
S—M	
S—P	

こうした推理の例として、ヘーゲルは「このばらは赤い、赤は色である、ゆえにこのばらは色をもつものである」という推理を挙げている（vgl. E §183 Zusatz TW8,335）。

またヘーゲルはこの推理が表明している一般的意味を次のように解する。「そのものとしては無限な自己関係であり、それゆえ単に内的なものである個別的なものが、特殊性を通じて普遍性としての定在のうちへと歩み出るものであり、そこでは個別的なものはや自分自身の上に所属するのではなく、むしろ外的関連の中に立つことになる」（GW12,93）。

つまり個別的なものがそのものにとどまりづけるのではなく、特殊な規定（前の例の「赤」）を媒介として、より普遍的な規定（「色をもつもの」）と関連づけられるが、それは個別そのものにとつては外的関連のうちに組み入れられるということである。

ここからヘーゲルはこの推理の欠陥を指摘することになる。その第一の批判は、主観性を前提とするこの形式の下では個別性、特殊性、普遍性という各規定の関係が形式的なものにとどまり、豊かな内容をもちえないということである。具体的には推理の本質的規定として既に確認した事態、すなわち概念の諸規定が自立的であると同時にそれらの統一としてもあるという事態が現成しないということである。

だがこの批判は単に概念規定という抽象的次元での欠陥を意味するのではない。ヘーゲルが形式的推論の欠陥として豊かな内容を持ちえないことを挙げたのは、推理の実際的機能に基づいてのことであつた。すなわちこの推理において、個別的なものは、直接的なものとして、無限に多くの規定性を持ち、この規定性のいずれもが特殊性として媒辞になりうる。そこからヘーゲルは二つの帰結を引き出す。（1）「個別は各々の異なる媒辞によって、各々の異なる普遍と結合される」（GW12,96）。（2）「個別は同じ媒辞によつても、またより多くの普遍と結合される」（ibid.）。したがつて個別のうちからどれを媒辞として選択するか、またその媒辞をどのような普遍に結合させるかは、全く偶然的で恣意的であることになり、「同じ主語にかかわる各推理が矛盾しあわざるをえなくなる」（ibid.）。こうした事態の実例として、

ヘーゲルは、「壁が青く塗られた」という媒辞にもとづいて、「壁は青い」と推理されればこの推理は正しいが、しかしまた「壁が黄色にも塗られた」とするならば、「壁は緑である」でありうるし、「壁は黄色である」という結論が導き出される可能性もあることを挙げている(vgl. ebd.)。ともかくヘーゲルは伝統的形式論理学において正しい推理と言われるものに従って、実際には厳密な結論に到達するわけではなく、またそのかぎりそれのみによって個別的事物の完全な把握を達成できるわけでもないことを指摘・批判しているのである。

ヘーゲルの推理の第一格に対する第二の批判は、推理の前提はなんら証明されたものではなく、証明を必要とするということである。そこから発生することの一つは、形式的推理が前提を証明するためには無限進行に陥らざるをえなくなることである。すなわちヘーゲルによれば、 $E \mid B \mid A$ の前提である $E \mid B$ と $B \mid A$ はなんら証明されたものではなく、これらの前提自身が証明されなければならない。さもなければこの格の結論たる $E \mid A$ も一つの仮説にとどまることになる。そして前提の証明が行き着く事態が次のように説明される。

「二個の前提はそれぞれ二個の推理を必要とする。しかしこの二つの新しい推理は再び四つの前提を必要とし、四つの前提は四個の新しい推理を必要とする。ところがこの四つの推理は八個の前提をもち、その八個の推理は再びその十六個の前提のために十六個の推理を生じ、以下このように幾何級数的に無限に進んで行く」(GW12:98)。

しかし、ヘーゲルは無限進行と欠陥を持つと規定された形式とが止揚されるとする。それは、第一格の大前提 $B \mid A$ を媒介するものとして、 E を媒辞とする推理 $B \mid E \mid A$ が証明され、小前提 $E \mid B$ を媒介するものとして、 A を媒辞とする推理 $E \mid A \mid B$ が証明されることによつてである。ここから推理形式 $B \mid E \mid A$ が定在の推理の第二格として、推理形式 $E \mid A \mid B$ が定在の推理第三格として位置づけられることになる。だが、この場合でも二つの前提が証明されていない以上、第一格の結論も暫定的なものにすぎないのである。

ところで、定在の推理第一式の前提が証明されなければならないというヘーゲルの主張は如何なる意味を有するのか。通常の形式論理学において前提の証明は求められない、ないしは前提の妥当性は自明とされることから、ヘーゲルの主張を無用とする見解も成立しうる。だが、前提の証明を必要とすると言うところにヘーゲルの固有性があるのであって、この点については後に検討を加えることにしたい。

ヘーゲルは第二格を、前提 $B \mid E$ と $E \mid A$ とを有し、 $B \mid A$ を結論とする推理形式とする。彼によれば、第二の前提 $E \mid A$ は、第一の推理によつて媒介された前提であり、第二の推理は第一の推理を前提している。しかし逆にまた第一の推理は、 $B \mid A$ を前提としたかぎりこの第二の推理を前提していることにもなる。

ところでこうした形で表現される推理が持つ内容について、ヘーゲルは次のように言う。

「この推理の規定的な、また客観的な意味は、普遍が即且つ向自的に規定された特殊ではないということである。——なぜなら、普遍はむしろ特殊の全体性であるからである。——そうではなくて、ここでは個別性を介して普遍の一種が取り出されている。そして普遍の種の中の他のものは、この直接的な外面性のために、この普遍から除外されている」(GW12.100)。

ここに表明されていることは、この推理において特殊の全体が普遍とされるのではなく、個別が媒介であることによつて、ある特殊は普遍とされるが、他の特殊は普遍とはされないということである。したがつて、この推理の結論 $B \mid A$ は、同じ $B \mid A$ が第一格において有していた普遍妥当性をもっていないということである。

ではなぜこのような事態が生ずるのか。その理由は、この推理が伝統的論理学における第二格であることにあり、このことをヘーゲル自身二つの前提を $B \mid E$ または $E \mid B$ と $E \mid A$ として次のように指摘している。「媒介は二度包摂される。言いかえると、媒介は二度とも主語であつて、従つて他の二つの名辞は、この主語に内属する」(GW12.101)。この格およびそれに対応する伝統的形式論理学の表式は次のようになる。⁽¹³⁾

$$\begin{array}{r} E \mid B \\ E \mid A \\ \hline B \mid A \end{array} \qquad \begin{array}{r} M \mid P \\ M \mid S \\ \hline S \mid P \end{array}$$

ヘーゲルは、この格における二つの前提の関係について次のように言う。

「したがつて前提 $E \mid A$ は媒介が一方の項の下に包摂されるという関係を意味するのであるから、他方の前提 $B \mid E$ は、それがもつとは反対の関係をもたねばならないことになり、 B が E の下に包摂されることができなければならないことになろう。しかし、このような関

係は規定的な判断「EはBである」の止揚であろう。すなわちこういう関係は、ただ無規定的な判断——特称判断——の中にのみ見出されるものであろう。したがって結論は、この第二格においては単に特称的でありうるにすぎない」(GW12.101)。

こうした結論そのものは、形式論理学の公理と称されるものから導き出される形式論理学の第三格についての規則、(1) 小前提は肯定である、(2) 結論は特称である、に依拠している。つまり、ヘーゲルの第二格においては小前提は「BはEである」ではなく、「EはBである」でなければならず、結論は「すべてのBはAである」という全称判断ではなく、「あるBはAである」という特称判断にならなければならないのである。かくして第二格は、特殊のうちのあるもののみが普遍として現われている、あるいは特殊において普遍の一つのあり方(一つの種)が現われているにすぎないことを表明するのである。

だがこうした事態はヘーゲルの改作の失敗を意味しているわけではなく、伝統論理学がこのような狭隘さをもたざるをえないことへのヘーゲルの批判として解されるべきものである。

c 第三格 E—A—B

第三格は、E—AとB—Aという前提から、E—Bという結論を導く推理という意味を持つ。しかもヘーゲルは、E—Aは第一の推理により、B—Aは第二の推理により、それぞれ媒介されたものである、として、「こうして一般にこの推論において推理の規定が完成する」(GW12.103)と言う。E—Bが他の格の前提となるかぎり、この格も媒介を行なうにせよ、「相互媒介」(ebd.)が、実現されることによってヘーゲルは推理規定の完成を認めた。

だが、彼がそのことをもってこの推理の妥当性を承認したかという点、そうではない。ヘーゲルはこの推理の一般的意味を次のように説くからである。

「推理E—A—Bをそれ自身としてみると、それは形式的推理の真理である。この推理は、形式的推理の媒介が抽象的普遍的な媒介であり、したがってそこでは両項はその本質的規定性の面から媒辞の中に含まれるのではなく、単にその普遍性の面から含まれているということ、それゆえ、その中ではまさに媒介されるべき当のものが結合されていないということを表わしている」(GW12.103)。

ヘーゲルが言っていることは、形式上この推理において個別と特殊とが普遍によって媒介されて結合されるが、しかしそれは $E-A-B$ という本来的な媒介を経てではなく、 $E-A$ 、 $B-A$ というように直接に普遍と結合されるだけで、媒介されるべき当のものが結合されていない、ということである。

そして、ヘーゲルがこうした定式化で批判しているのが、伝統的形式論理学の第二格であることは、この第三格の形式的特徴が次のように述べられていることから明らかである。「媒辞は普遍として、その二つの項に対して、これを包摂するものであり、いいかえれば述語である。それは決して包摂されるもの、いいかえれば主語ではない」(GW12.103)。この格を伝統的形式論理学に対応づければ、次のように表現される。

$$\begin{array}{r} E-A \\ B-A \\ \hline E-B \end{array} \qquad \begin{array}{r} P-M \\ S-M \\ \hline S-P \end{array}$$

形式論理学の第二格の規則として次の二つがある。(1) 前提の一つは肯定であり、他の一つは否定である。したがって結論は否定である。(2) 大前提は全称でなければならない¹⁶⁾。(例「全て鉄は長く空気に放置するときには錆を生ずる、この金属は長く空気に放置しても錆を生じない、故にこの金属は鉄ではない」)ヘーゲルは、この規則の解釈として次のように言う。

「この推理も推理の一種として推理〔の法則〕に従うべきであるが、一方の $E-A$ の関係が既に正当な関係をもつ以上、他の関係 $A-B$ が正当な関係をもつようになりさえすれば、そのことは果たされることが出来る。しかし、このことは、主語と述語との関係が無関心であるような判断、すなわち否定判断においてのみありうる。そうすると推理は正しいものになるが、結論は必然的に否定となる」(GW12.103)。

結論が否定となるということは、「 E は B でない」でも「 B は E でもない」でもよいことを意味し、翻つては E と B のどちらが主語でも述語でもよいこと、また前提のどちらが大前提でも小前提でもよいことを意味する。したがってヘーゲルによれば、第三格では推理形式の質的側面が捨象されてしまうのである。

ではこうした第三格の問題性の淵源はどこにあるのか。ヘーゲルは次のように端的に媒辞となる普遍が質的、抽象的なことに求める。

「普遍が媒辞となるこの推理の客観的意味は、媒介者が両項の統一として本質的に普遍だということである。しかし普遍は最初は単に質的な、または抽象的な普遍性にすぎないから、両項の規定性は、その普遍の中には含まれていない。それゆえにそこに両者の結合が生じなければならぬとすれば、その結合もまたこの推論の外にある媒介の中にその根拠をもたなければならぬ。したがってこの根拠の点から言えば、前の各推理の諸形式の場合と同様にその結合は全く偶然的である」(GW12.104)。

結局ヘーゲルは質的推理と捉えられるものにおいて媒辞となる普遍性が、抽象的で、他の規定を含みえないがゆえに、両項の規定性も没交渉な外面的規定性であることになると捉えるのである。そしてこうした事態の一般的帰結を推理の第四格とするのである。

d 第四格 A—A—A または数学的推理

この推理は「二つの物または規定が第三のものに等しいなら、二つは互に等しい」(GW12.104)と定式化される。これは通例、 $A \parallel C$ 、 $B \parallel C$ なら、 $A \parallel B$ とされるもので、伝統的形式論理学では、次のように表記される。¹⁹⁾

$$\begin{array}{c} P-M \\ M-S \\ \hline S-P \end{array}$$

ここでは二つのものとその媒介との間には包摂や内属の関係はなく、ただ同等性だけが問題になる。それゆえヘーゲルは質的無関心性に着目して数学的推理とも各づけるのである。そしてヘーゲルは「第四格はアリストテレスの知らなかったものであり、全く空虚で何の興味もない区別にかかわるものである」(GW12.103)と否定的な評価のみを与えている。

では以上にみたヘーゲルの推理の扱いは、推理論そのものとして如何なる意義を有するのか。次にこの問題に関わらなければならない。

(二) 形式論理学批判の要点とその帰結

これまでヘーゲルの定在の推理を伝統的論理学における推理形式の問題性、とりわけ媒辞としての普遍性概念の問題性の開示として捉え返してきたが、次に検討されねばならないのは、ヘーゲルがそのような開示を通して、形式論理学の核心問題をどこに見出し、どのように克服しようとしたかということである。この課題を遂行する手懸りとしてトレンデレンブルクのヘーゲル批判のポイントを確認することから始める。

さてヘーゲルの定在の推理に対するトレンデレンブルクの批判は、ほぼ次の三点に集約される。(1) ヘーゲルの定在、反省、必然性という推理の区分は、通常の推理の取り扱い方と異なるが、それは定言判断において初めて「具体的普遍」が出現するという考え方と結びついている。普遍的なものが各々の推理の本質的要素であるなら、ただ直接的に感覚的なものだけを把握し、普遍的なものを全く予感しないという前提に立つ定在の推理は成立しない。質的推理も推理としては、全体性の推理とみなされなければならない、そのかぎり、直接性の推理は實在不可能な造り物にすぎない。(2) 質的推理は、説明では第一格の諸前提 $B \mid A$ 、 $E \mid B$ の基礎づけを必要とし、それを第二格、第三格から受け取る。だがこの展開は見かけだけである。第二格は特称結論を、第三格は否定結論を導出したが、それらは、論理学の推理の第一格の規則、(1) 小前提は肯定命題でなければならぬ。(2) 大前提は全称命題でなければならぬ、に合致しない。したがって第一格は基礎づけられないだけでなく、格と格の結合も生成的とは言えない。また、第二格、第三格の結論は、直接的質的推理という建前に立ちながら、演繹が導入されている。(3) 第四格は、質的推理として向項と媒辞という区別あるものの関係を扱うべきであるのに、区別ないものの扱いになっている。また如何にして質的推理から量的推理が生ずるかの説明が欠けている。

以上のトレンデレンブルクのヘーゲル批判は、それ自身妥当性をもつように見えるにせよ、ヘーゲルが根本的に問題にしたことを、無意識的にか意識的にか見逃しているがゆえに、真の批判たりえていない。ではヘーゲルが根本的に問題にしたことは何か。それは、アリストテレス、更には形式論理学において真の論証的推理は成立しているかという問題である。ここではヘーゲルが伝統論理学において論理学的關係と存在論的關係とに通底する問題性を見据えるとともに、伝統的論理学の推理を感覚的質的推理として再定立した所以を確認することを以てトレンデレンブルクによるヘーゲル批判の不成立の論拠とする。

まず最初に伝統的論理学における論理学的関係と存在論的關係に通底する問題性とは、伝統的論理学において定立されているものが推理の主観的形式ではあっても客観的形式ではないということである。第一にアリストテレスのシュロギスモスは述語が主語に内属するという存在論的關係において命題、すなわち主語―述語結合の妥当性が測定されることを基礎として成立している。この場合主語―述語關係を存在論的というのは、主語は実体として、述語はその属性として考えられており、このような実体と属性との關係は存在論的關係だからである。そしてこのような存在論的關係が推理の基本にあることは、ヘーゲルが次のように言うところから明らかである。「アリストテレスは、推理の本性について、『もし三個の規定の一方の項が中間の規定全体の中にあり、そしてこの中間の規定が他方の項全体の中にあるというような、三個の規定が相互に關係しあうとすれば、この両項は必然的に結合される』と述べているから、彼は推理をどちらかといえば、単なる内属 *Inhärenz* の關係と見ている」(GW12:93)。だが、属性が判断主体によって定立されるかぎり推理は主観的にとどまる。

もう一方伝統的論理学で命題における主語と述語との結合關係が、単なる主語と述語という論理学的關係において捉えられていることも事実である。その際主語―述語結合の妥当性が包摂關係において捉えられることは、たとえば、「すべての人間は動物である」という命題において、主語の指示する対象の範囲、すなわちその外延の全部が、述語のうちに包摂されることが述語づけられることと捉えられることから明らかである。その際述語づけを行なうのは言うまでもなく述定主体である。そしてヘーゲルがこうした理解を前提に第一格 E―B―A を範式化したことは、次の引用が示している。「個別は特殊の下に包摂され、特殊はまた普遍の下に包摂される。従って個別もまた普遍の下に包摂されるのである。これを言い換えると特殊は個別に内属するが、普遍はまた特殊に内属する。だから普遍はまた個別に内属する」(GW12:94)。

だが結論的に言って、この包摂、内属によって構成される推理が厳密な論証を保證するかというと、既に見た如く、一つの主語に対して数知れない推論が等しく可能となり、個々の推論はその内容の点で偶然的で、相互に矛盾の關係に立つことになる。そのかぎり、ヘーゲルが伝統的論理学によって構成される推理があくまでも主観的形式にすぎず、事物の客観的形式たりえないと断じたことは、正当と言える。ではもう一つの問題、すなわちヘーゲルが伝統的論理学における推理を感覺的質的性格のものとする論拠はどこにあるのか。トレンデルンブルクは、伝統的論理学そのものが感覺的經驗的世界を超えて、普遍性の基盤に立っていると強調したが、その論証はどこにもない。

翻ってアリストテレス自身論証的推理の前提については、個別から普遍へとたどる帰納的推理によって得られるとした。すなわち彼は、「私たちが根本的前提を知るにいたるのは、帰納的推理によってでなければならない」と言っている。このようにして得られる論証的推理の前提はいかに普遍的で、真であると強弁されようとも、感覚的、質的性格を免れ難い。実際アリストテレス自身帰納的推理によって得られた前提そのものの真正性の論証不可能を率直に認めているのである。⁽²⁾このかぎり、ヘーゲルが伝統的論理学の基盤を感覚的質的世界に置き、そこにおいて伝統的論理学が証明されない命題を自己の立脚点としていることを明示したことは、適切だったのである。したがってヘーゲルは第一格の基礎づけを目指したかに見えながら、実際にはその不可能性を示したのである。

三 反省の推理の論理構造とその基底

ヘーゲルは推理の第二群として反省 Reflexion の推理を挙げ、その一般的性格を次のように記述している。

「いまや推理において、抽象的な二つの名辞のほかにまた両者の関係が現存し、その関係が結論の中で媒介された必然的な関係として規定される。だから各規定は、実際は個別的な規定性としてそれ自身であるのではなく、他の各規定性の関係として、すなわち具体的な規定性として措定されている」(GW12.110)。

ヘーゲルによれば、ここで両項は本来の個別性と相関関係の規定としての普遍性を併せもつ。そこから媒辞も、一方では個別性であつても、全体としての個別性であり、もう一方では個別性と抽象的普遍性とをその中に統一している普遍性、類となる。こうした反省の推理において、ヘーゲルは個別、特殊、普遍相互の媒介的關係を、全体性 *Alheit* の推理、帰納 *Induktion* の推理、類比 *Analogie* の推理に分けて考察している。ここでも、最初ヘーゲルの叙述を既成推理論に対する批判として捉え返すとともに、その理論的意義をヘーゲルに対する批判との対質を介して明らかにしたい。

(一) 反省の推理の三形態とその問題点

a 全体性の推理

全体性の推理とは、媒辞が「すべて」という規定性を持ち、主語があらゆる特性をもつ「全ての現実的な具体的対象」(GW12.112)である推理である。ヘーゲル自身これを「完全性の形態にある悟性推理」(GW12.111)と名づけているように、全体性の推理は形式論理学において全称判断を大前提とする推理にはかならない。そのかぎり形式上これはヘーゲルが言う定在の推理の第一格と同じものである。ヘーゲルが定在の推理と全体性の推理を区別するのは、定在の推理においては媒辞が抽象的な特殊であつたのに対して、この推理においては媒辞が「具体的な特殊性」(ebd.)となつてみるとみることによつてである。つまり定在の推理においては主語の個別的規定性に対して抽象的な媒辞が偶然的恣意的に結合されたが、全体性の推理においては、媒辞が個別性を持ち、具体的なものであるので、「この媒辞を介して、具体的なものとしての主語に属するただ一個の述語だけが主語と結合されることができぬ」(GW12.112)。ヘーゲルはこの例として「すべての緑色のもの、あるいはすべての規則正しいものは快適である」という判断を挙げている(vgl. ebd.)。ヘーゲルが意図しているのは、ここでは、緑色のものや規則正しいもののすべての現実的具体的対象に適合する述語が定立・結合されており、醜いなどという述語が入り込む偶然性は遮断されている、ということであらう。

しかし、ヘーゲルは、この推理の不十分性を全体性が概念の普遍性ではなく、「反省の外的普遍性」(GW12.111)にすぎないことに見出している。この批判は、全称推理と言われるものが「一つのたんなる手品」(GW12.112)でしかないことと見ることを具体的内容としている。ヘーゲルは、「すべての人間は死ぬ、ところでカイウスは人間である。ゆえにカイウスは死ぬ」という推理を挙げ、大前提は結論が正しいときにのみ正しいにすぎないと批判する。すなわちカイウスが偶然死ななければ、結論は間違いで、大前提は成立しなくなる。かくしてヘーゲルはこの推理の実際を次のように指摘する。「大前提はそれ自身において正しいのではなく、いいかえると大前提は直接的な前提された判断ではなく、自分がその根拠であるべき結論を既に前提しているのである」(GW12.112)。言いかえれば大前提は結論を前提するのであり、このかぎり、全体性の推理は循環論法なのである。ヘーゲルはそこから全体性の推理を「外面的な、空虚な推理の仮象」(GW12.113)と規定する。

このような全称判断を含む推理に対するヘーゲルの批判には、異論の余地があるかも知れない。たとえば、科学の法則や問題解決のための仮説は非枚举の全称命題であり、それらは循環論法にはならないとされる。²⁰だが枚举によらない全称命題とは、特称命題ではないにせ

よ、それによつては蓋然性が表明されるにすぎず、全称命題とは言えないものであろう。そしてそれは、實際の手続き上ヘーゲルが言う帰納、すなわち個別から普遍（全称）にいたる推理を前提し、これに依存するものとして仮説性を有し、真の意味での演繹推理とは言えない。次にこの帰納の推理そのものに対するヘーゲルの取り扱いを検討しよう。

b 帰納の推理

帰納の推理は、言うまでもなく、個別を媒辞として普遍（全体）と特殊を結合する推理である。それゆえ $A-E-B$ という範式をとる。ヘーゲルによれば、ここにおいて一方の項は「直接的な類」であり、この類は媒辞としての個別の全部、または媒辞の種の全部を挙げつくすことによつてみだされる。一方の項は何らかの述語であるが、その述語はこれらすべての個別に共通のものである（vgl. GW12.113）。こうした推理の例としてヘーゲルは『エンチクロペディー』において、「金は金属である、銀は金属である、銅、鉛、等々もそうである、すべてこれらの物体は電導体である、故にすべて金属は電導体である」という推理を挙げている（E §190 Zusatz, TW8.342）。そしてヘーゲルはこの推理が形式的推理の第二格、 $A-E-B$ と区別される理由を、形式的推理では媒辞 E が前提の一つの中で包摂するものでなかった、すなわち特称判断であつたのに対して、帰納法において媒辞が「すべての個物」（GW12.114）である点に求める。したがつてヘーゲルは、この推理を「経験の推理」と規定して、その特質を次のように述べる。

「帰納法はもろもろの個別を類の中に主観的に総括する推理であり、そして普遍的規定性がすべての個別において見出されるという理由で、類を普遍的規定性と結合する推理である」（GW12.114）。

つまり、ヘーゲルはこの推理を、例えば、金属という類に属する個別としての金、銀、銅等々が全て電導性という規定性を持つことから、金属という類を伝導体という普遍的な関係と結合する、という機能を持つものと見るのである。

しかし、このような経験的帰納法には、経験的な個別をいくら集めても、厳密な普遍性や必然性の証明はできない、という致命的な問題がつきまとうことを、ヘーゲルは次のように表現している。

「帰納法はむしろ、まだ本質的には主観的な推理である。媒辞はそれぞれの直接性としてある個別であつて、全体性によるこれらの個別

の類への結合は外的反省である」(ebd.)。

すなわち、個別の枚挙によって形成される普遍性は外面的なものにすぎないので、媒辞となる個別の無限系列は決して完結せず、悪無限性への進行が現われるのである。つまり普遍と個別との同一性ないしは統一性は、「果てしない当為」にすぎず、したがってまた「帰納法の結論はそのかぎり蓋然的にとどまる」(ebd.) ことになるのである。

ではこのような帰納法の問題性はどこから来るのか。ヘーゲルはそれを帰納推理が仮定に立脚していることに求め、その連関を次のように明らかにする。

「帰納法は、知覚が経験となるためには、無限に進展すべきだということを表現しているから、類がその規定性と即且向自的に結合していることを前提している。したがって全体性の推理が結論をその前提の一つとして前提していたのと同様に、帰納法はむしろ本当はその結論を直接的なものとして前提している。だから知覚が完全にならないことは明らかであるにもかかわらず、この帰納法に基づく経験は妥当なものとして仮定される。しかしそこでは経験が即且つ向自的に真であるかぎり、この経験に対する如何なる反証も挙げられないということが仮定されうるにすぎないのである。」(GW12.114f.)

つまりヘーゲルが帰納法に見るのは、類とその規定性との結合が結論として前提された上で、限られた経験に基づくものであっても、その経験から得られた命題を普遍妥当とする仮定なのである。帰納の推理に対するヘーゲルのこの批判は、帰納論理の限界が、特定多数の個物を普遍ないしは全体と等置する短絡とそうした短絡を正当化する論理構造に存することを明示している。ヘーゲルはこの論理構造を類比の推理として次に検討の対象とするが、帰納の推理そのものに対する批判としては以上で十分であろう。

c 類比の推理

類比の推理は、ヘーゲルによれば、直接的推理の第三格と同じE—A—Bという範式を持つ。しかしその媒辞は直接的推理におけるような個別的質ではなく、「一個の具体的なものの自己内反省としての、したがって具体的なものの本性であるところの普遍性」(GW12.116)とされる。これは媒辞が特定の具体的なものでありながら、同時に普遍性を有することを意味する。

ではこの推理の具体的形態はどういうものか。ヘーゲルは『エンチクロペデー』においては類比を一定の類に属す事物が一定の性質を持つということから、同じ類に属する他の事物もまた同じ性質を持つことを推理することと一般化した上で、次の例を挙げている。「人々はこれまであらゆる遊星においてこうした運動法則を見出した。ゆえに新しく発見される遊星もおそらく同じ法則にしたがって運動するだろう」(E§190 Zusatz, TW8.343)。ヘーゲルは類比が経験科学において重んじられ、重要な成果を生み出していることを認め、類比を「理性の本能」(ebd.)とさえ評価する。それによって経験的に見出される個々の規定が事物の内的な本性あるいは類にもとづいていることが予感されるからである。

しかし、ヘーゲルは類比にこのように「深いもの」があると同時に「皮相なもの」もあることを指摘している。『論理の学』においてはそのような例として「地球は住民をもつ、月は一つの地球である、故に月は住民をもつ」(GW12.115)という推理が挙げられている。いずれにせよ、ヘーゲルは類比の推理に推理そのものとしては二つの面での問題があることを指摘している。

第一は、悟性の形式または理性の形式を単なる表象の領域に引き下げてしまうことである。すなわち「月は住民を持つ」という推理においては、媒辞「天体としての地球」を通じて二つの個別「地球と月」は一つとされるが、そうされるのは、媒辞の普遍「天体」が一つの単なる質にすぎないのに、一方の個別「地球」が他方の個別「月」の述語とされることによってである。つまり、普遍「天体」が一つの質として主観的にとらえられることから、普遍があれこれの徴表「住民をもつ等々」とされ、「単なる類似」から異なる個別「月と地球」が同一とされるのである(vgl. ebd.)。このように地球も月も天体であり、「類似」により「月は一つの地球である」という命題が導かれる場合、この命題は表象に基づく、とヘーゲルは考えるのである。

しかしながら、ヘーゲルは類比の推理が「一つの特有の形式」(GW12.116)もつことに注意を払っている。すなわちヘーゲルによれば媒辞も両項も具体的な規定を持つことにより、形式の規定がまた内容の規定として現われるのである。そこにヘーゲルは「形式的なものの必然的な進展」(ebd.)を認めるのである。

しかしそれでもヘーゲルは類比の推理の第二の問題として四個名辞の現存を挙げる。類比の推理は「一つの対象が一つまたは若干の特性において一致するときは、一方のものには他方のものもつもう一つの別の属性も属する」(ebd.)という形式を持つのであり、このことは前

の例で言えば、「地球」と「月」は「天体」であるという特性の点で一致するから、「生物が住んでいる」という属性の点でも一致する、という形式となる。ヘーゲルは形式論理学における「四個名辞の虚偽」と呼ばれる誤謬推理ではないにせよ、この推理が四個名辞のために「不完全な推理」となることを次のように述べている。

「なぜなら、一方の主語が他方の主語と同じ普遍的本性をもつにしても、この他方の主語に対しても推理の結果として帰せられる規定性を一方の主語がその本性からもっているか、それともその特殊性のためにもっているかは不確定だからである。例えば、地球が天体一般としてそこに住む生物をもつのか、それともただ特殊な天体としてのみそうなのかは不確定なのである」(GW12.117)。

言うまでもなく、類比の推理において、一方の主語がその規定性を本性上もっているのか、特殊性のためにもっているのか、特定されることはない。そこからヘーゲルは類比の推理の問題性を、個別性と普遍性とを媒辞の中で直接的に結合している反省の推理の一形態であることに求める。すなわち全体性の推理においては媒辞は結論の個別を前提している全体性にすぎず、帰納の推理においても媒辞は個別の無限進行にすぎず、類比の推理においても媒辞は、個別でありながら普遍性をもったものとされつつも、直接的な結合であるために個別性を免れえないことが確認されるのである。したがって反省の推理は媒辞を個別性とするがゆえに、一般的に $B-E-A$ という範式をとるものとされる(vgl. GW12.118)。

以上の如くヘーゲルは媒辞に着目する形で反省の推理の諸形態を区分し、その問題点を明らかにした。では反省の推理とは異なる次元の推理はどのように規定されるのか。ヘーゲルは言う。「この個別の直接性が止揚されて、媒辞が即且つ向自的にある普遍性として措定されることになる」と、推理は $E-A-B$ のという形式的範式をとることになる」(GW12.118)。これが「必然性の推理 der Schluss der Notwendigkeit」である。だが、これを検討するためにも、視角を変えて、ヘーゲルが反省の推理を一つのタイプとして定立する意図を捉え返しておこう。

(二) 反省の推理の蓋然的性格

トレンデレンブルクはヘーゲルの反省の推理について以下のような批判を加えている。(1) 全体性の推理が質的推理の進行から発生す

ということとは認められない。推理は最初から普遍的なものと反省との連結から始まるのであり、全体性の推理として定式化される特別の形式はない。全体性の推理は形式論理学の第一格の推理にすぎない。⁽²⁾ 帰納はある点でアリストテレスの第三格と合致する。両方の前提の同じ主語の取りまとめ、媒概念の多様化は既に帰納の本質を含んでいるのである。更に帰納は個体と種によって普遍性を獲得しようとする。たしかに第三格は常に特称判断を与えるが、アリストテレスは帰納を第三格に比定したにせよ、結論の特殊を全称に転換するという条件が付加されるなら、主語と述語は同一となる。⁽³⁾ 類推の力は普遍的なものの形成と導入のうちに存し、この新しい普遍的なものは、推理の三つの項の中間概念であり、第一格中項である。したがって推理は第一格の推理となり、このことは、ヘーゲルの挙げている地球と月の例においても示される。⁽⁴⁾

このようなトレンデレンブルクの批判の意図が、全てヘーゲルの推理の諸形態は、アリストテレスの三つの格の変形にすぎず、従って、それらに還元できるという点にあることは明白である。だがそのような批判によつてはアリストテレス推理論が含む一つの重要な問題が見失われてしまう。まず第一の問題とは、アリストテレスの推理論が、彼が言うような意味での論証法になつてはいないということである。先に確認したように、アリストテレスは論証的推理の前提は個別から普遍へとたどる帰納的推理によつて得られるとした。だが論証的推理の前提が帰納的推理によつて得られるにしても、その前提が普遍あるいは真としてえられたということは論証されたことになるのであろうか。アリストテレス自身はこの前提そのものの論証不可能を率直に認めて、帰納的推理によつてもたらされた前提の普遍・必然性を認知するのは、私たちのヌース nous であるとした。⁽⁵⁾ このヌースは理性的能力であるにせよ、推理的能力ではなくして、直観的能力として構築されている。そしてアリストテレスによつては、このようなヌースによつてその普遍・必然性においてとらえられた前提は、その媒辞によつて結論命題の主語と述語との結合関係もまた普遍必然化せしめて、そこに論証的推理は学的認識をもたらすことが予期されている。だがヘーゲル自身の帰納的理解に基づくならアリストテレスのこの推理の基本的場面での手続きはきわめて疑わしい内容を含んでいる。何よりも帰納によつて獲得されるものは、ヘーゲルによつては「蓋然的」でしかなく、経験的な個別をいくら集めたところで厳密な普遍性や必然性は証明できない。あえて帰納的推理によつてもたらされた前提を普遍・必然的なものとするなら、そこには独断がある。トレンデレンブルクのように、アリストテレスの推理論を唯一絶対のものとして、すべてをそこに還元したところで、それはヘーゲルの問いに答えたこと

にはならないのである。

もう一つのトレンデレンブルクの批判の問題性は、アリストテレスを絶対化することによって、ヘーゲルの推理論が提起している内容を全く理解できなくなっていることである。ヘーゲルが展開している推理論の眼目は、反省の推理のレベルでの媒辞における個別と普遍との関係であった。ヘーゲルが試みている推理の形式分類が媒辞の規定内容を基準とすることは、これまで見て来たとおりである。その基準に基づいて、旧来とは異なる推理の編成様式が明らかにされれば、それはそれで一つの寄与として認められるだろう。トレンデレンブルクの批判によつては、ヘーゲルが開示しようとした論理世界の立体構造が視野に収められなくなるのである。この意味においてトレンデレンブルクのヘーゲル批判は、獨創性を欠いた守旧的なものと言わざるをえない。

四 必然性の推理の編成原理とその非形式性

必然性の推理において媒辞は、定在の推理におけるような単純な規定的普遍性であると同時に反省の推理におけるような、区別された両項の全体的規定性をもつ普遍性とされる。ヘーゲルはそれを「一つの充実された、しかも単純な普遍性、事物の普遍的本性、類」(GW12.118)と規定する。このような媒辞に基づく推理が必然性の推理である。何故この推理が必然性の推理と称されるのかと言えば、まずヘーゲルにおいて必然性とは「内的なものと外的なものとの一つのものとなる交互的な転化」(E. §147 [TW8.288])である。そして、この推理においては、推理の両項のいずれが「内的なもの」と「外的なもの」の位置を占めても、交互的な転化が起こり、両者が一つのものになるからである。その理由は媒辞が両項の規定性の自己内反省であり、両項が媒辞の中にその内的同一性を持ち、媒辞の内容規定が両項の形式規定であることにある。したがってこの推理において各名辞を区別するものは「外面的な、非本質な形式」(GW12.119)にすぎず、各名辞は「一個の必然的な定在の契機」(ebd.)としてある。

ヘーゲルはこの推理の展開過程を(1)各名辞の連関が内容として本質的な本性で、両項が非本質的な存立としてある形態(定言的推理 der kategorische Schluss)。(2)両項が媒辞であるような全体性として措定される形態(仮言的推理 der hypothetische Schluss)。(3)実体的な内容にすぎない関係の必然性が措定された形式の関係となる形態(選言的推理 der disjunktive Schluss)として叙述する。以下ヘーゲ

ルの推理論構築の固有性を確認するとともに、その意義を照明してみたい。

(一) 必然性の推理の三形態の展開過程

a 定言的推理

定言的推理は定言判断をその前提としてもつ判断である。ヘーゲルにおいて定言判断は類を述語とし、主語がこのうちに自分の内在的本性をもつ判断であるから (vgl. GW12.78)、「定言的推理において媒辞が「客観的普遍性」(GW12.119)となる。具体的にはこの推理は、主語としての個体、類に対する抽象的普遍性としての種、媒辞の更に規定されたものとしての類を三項とする推理で、第一の形式推理の範式 $E - B - A$ をとるものとされる。したがってこの推理は、「E (個体) は B (種) である、B (種) は A (類) である、ゆえに E (個体) は A (類) である」という内容となる。²⁵⁾

だが定言推理が定在の推理の第一格と同じ範式をもつことにはどのような意味があるのか。ヘーゲルは定在の推理との相違を媒辞を基準に次のように強調する。

「媒辞は個別の本質的な本性であって、個別の規定性または特性のどれかの一つではない。また普遍性の項も抽象的な普遍などといったものではなく、普遍的な規定性であり、類の区別としての種的なものである」(GW12.120)。

このように定言的推理においては、定在の推理において主語が媒辞によってどれかの質と結合される、というような偶然性は克服され、媒辞も普遍性も個別との必然的結合において定立されることになる。また定言的推理は、反省の推理のように、結論を前提することがないものとされる。したがって各名辞間には次に言われるような、同一的な関係が成立することになる。

「各名辞は、実体的内容に基づいて、相互に即且つ向自的な関係としての同一的な関係にある。すなわちここには三つの名辞を貫徹する一個の本質があり、個別性、特殊性、普遍性の各規定は、この本質の中で単に形式的な契機であるにすぎない」(GW12.120)。

ここに言われる各名辞の同一的關係の中に既に「客観性」が現われ始めていることを指摘しながらも、ヘーゲルは両項が概念または媒辞に対して無関心的な存立をもつ点にこの推理の「主観的な面」(obj.)があることを確認する。あるいはヘーゲルは媒辞が両項の内容に充ち

た同一性であるにせよ、それが実体的同一性であって、「形式的同一性」(eod)ではない点にこの推理の「主観的な面」を見出すのである。ヘーゲルが問題とする論点は次のような形で表現されている。

「概念の同一性は、まだ内的な紐帯であり、したがって関係としてはまだ必然性である。媒辞の普遍性は堅固な肯定的同一性であって、まだその両項の否定性としてもあるのではない」(eod)。つまり実体は各名辞を貫く一つの本質として存在するにせよ、それは固定的な同一性にとどまり、他者たる両項への関係や媒介においてある動的な同一性として捉えられていないのである。したがって「単に形式的な、内的な同一性」(GW12.121)を克服し、動的同一性を確立するのが、次の仮言的推理の課題となる。

それはともかく、カントが定言判断を実体性の認識に関連づけたことを承けて、ヘーゲルが定言的推理を実体的同一性の連関に対応づけ、推理そのものを実体の客観的存在形式として再指定することを試みていることは明らかである。つまり推理の存在論的解釈が着手されているのである。

b 仮言的推理

仮言的推理は次のような形式をとる。「もしAがあるなら、Bがある。ところでAはある。故にBがある」(GW12.121)。

ヘーゲルはこの大前提、小前提、結論が持つ意味をそれぞれに即して、以下のように明示している。

ヘーゲルが大前提の仮言判断のうちに見出すのは、まず第一にAとBとの共在すなわち現象的存在相互の無関心性の下にある必然性または内的実体的同一性、すなわち「内面的に根底となっている同一的な内容」(eod)である。ここでは前の定言的推理の結論が大前提とされているのである。そこから判断の両項は、単なる直接的な存在ではなく、「必然性によって支えられている存在、従って同時に止揚された存在または単に現象的存在」(eod)と捉え返される。判断の両項は更に概念規定の面から次のように把握される。「次にそれら両項は普遍性と個別性という判断の両項として互いに関係しあう。だから一方は諸々の制約の全体としての内容であり、他方は現実性としての内容である。けれども、いずれの項が普遍性とされ、いずれの項が個別性とされるかは不定である」(GW12.121c)。実際には制約の全体、現実性のいずれもが普遍と個別との統一としてはじめ存立するものである。

ところでヘーゲルはこの制約と被制約の関係を原因と結果、根拠と帰結に置き換える可能性を認めながらも、制約と被制約の相關関係を仮言的推理の關係に一層適合し、因果關係などよりより普遍的な規定とする (vgl. GW12.122)。そこに単なる因果性ないし根拠—帰結連関を超える、より根源的な關係性の規定を確定しようとする試みが認められる。

更にヘーゲルは小前提「Aがある」にも固有の解釈を施す。すなわち小前提は、一方で「Aの直接的な存在」を言表するが、他方でAは自分を止揚する存在であるから、「媒介する存在」(GW12.122)でもあることを表明している。つまりAは推理の主語であると同時に媒辭であり、「客觀的普遍性あるいは同一的内容の總体性」(媒辭)と無関心的な直接性「主語」との矛盾」(ebd.)として「活動性」という規定を持つのである。こうして大前提との関連では、Aは諸条件の總体としての客觀的普遍性であり、Bを規定する内容の全体性をもったものであると同時にそれ自身で直接的に現存するもの、Bを産出する活動性をもったものと捉えられるのである。この媒辭が更に必然性としても客觀性を獲得しているとみることをヘーゲルは次のように言う。「だからこの媒辭はもはや単に内的な必然性ではなくして存在している必然性である。すなわち客觀的な普遍性は、自分自身への關係を単純な直接性として、すなわち存在としてもっている」(ebd.)。

また結論「Bがある」において表現されているものを、ヘーゲルは「Bが直接的な存在者でありながら、また他者によってある、すなわち媒介されたものであるという矛盾」(GW12.123)と規定する。それゆえ形式上結論は媒辭と同一の概念であり、AとBとの絶対的内容は同一なのである。AとBはヘーゲルによれば、表象から見た場合の同一の根底の二つの異名にすぎない。こうして「媒介するものと媒介されるものとの同一性が現存する」(ebd.)ことになる。

以上みてきた如く、ヘーゲルは仮言的推理において、AとBとの關係の「必然性」とBが「必然的存在」としてあることが結合され、AとBとの「同一的内容」(ebd.)が明確に把握されているとする。しかもこのことが単に即自的にそうであるということにとどまらず、推理によってまた措定されたとする。

このあと推理は、条件づけるものと条件づけられるものとの同一性、必然性にとどまらず、「自分を区別するものでありながら、このような区別から自分を取りもどして自分の中で総合する同一性」(GW12.123)という推理形式である選言的推理に移ることになる。

ともかくヘーゲルは仮言的推理のうちに本質的相關の論理の事物的次元での表現を見出すのであって、そこに彼は主觀的思惟の働きと客

観的事物の存立との対応関係を見出すのである。

c 選言推理

選言推理は形式的推理の第三格の範式、 $E-A-B$ の形をとる。問題になる媒辞は「形式によって充実された普遍性」(GW12.123)と規定される。この規定の内容は、ヘーゲルによって次のように説明されている。

「媒辞は総体性として、すなわち展開された客観的普遍性として規定された。だから媒辞は普遍性であるとともに特殊性であり、また個別性である。普遍性としては、媒辞は第一に類の実体的同一性である。しかし媒辞は第二には、特殊性をその中に取り入れているような類の実体的同一性としてあるが、そのとき特殊性は実体的同一性と等しいものとされている。言いかえると媒辞は類の実体的同一性の特殊化の全体を中に含む普遍的領域としてある。——すなわちもろもろの種に分かれた類としてある」(GW12.123f)。

この媒辞をAとすると、これは普遍性としては類の実体的同一性としてあるが、同時に種としての特殊性B、C、Dをとりいれ、しかもこれらに等しいという事態がある。しかしこの特殊化は区別であるから、B、C、Dのあれか、これか、すなわち諸規定の互の排斥が存する。そこで選言推理は次のような表現形式をとることになる。

「AはBであるか、Cであるか、またはDであるかである。ところがAはBである。故にAはCでも、またDでもない。
あるいはまた

AはBであるか、Cであるか、またはDであるかである。ところがAはCでも、またDでもない。故にAはBである」(GW12.124)。

この推理において、ヘーゲルは二つのことを引き出す。まず、Aは、第一の前提においては普遍的であり、第二の前提においては規定的なものとしてあるいは一つの種としてあり、結論においては排他的な個別的な規定性として指定されている。つまり、Aはそれ自身普遍—種(特殊)—個別という規定をもつ。もう一つ、ヘーゲルはこうしたAのあり方のうちで、媒介されたものとして出て来るものを、「個別性の形をとったAの普遍性」とし、それを媒介するものもこのAとする。こうした事態が自己媒介であることは次のように言われることから明らかである。「この意味で仮言推理の真理であるもの、すなわち媒介するものと媒介されるものとの統一は、選言的推理の中で指定

られる」(ebd.)。

ヘーゲルはこのように普遍性が特殊として多様に展開しながら同時に現実的個別として限定して自己の規定された統一性を確立することが選言的推理において、表明されているとみるのである。そしてこれが推理の完成であると同時に推理の運動の結果は媒介の止揚によって生じた直接性であり、存在であるとされる (vgl. GW12.126)。

(二) 必然性の推理における非形式性

トレンデレンブルクはヘーゲルの必然性の推理の扱いに関して次のような批判を展開している。(1) 多くの欠陥を有する帰納と類比から定言的推理へどのように転換できるのか、無制約的意味を有する定言的推理の生成は弁証法的発展において把握されていない。⁽⁸⁾(2) 仮言的推理は必然的関係を形式あるいは否定的統一による連関として叙述しており、これは選言的推理の本質を構成する媒介するものと媒介されるものとの統一を既に含んでおり、あえて選言的推理の内容展開は必要ない。また仮言的推理においては個別が普遍に内属することが最も抽象的に表現されているだけで、あらゆる他者を欠除し、包摂の事実のみが内容とされているので、定言的推理のより完全な展開とはみなされ難い。⁽⁹⁾(3) 選言的推理は、形式の意義という点からは定言的推理より高次にあるのではない。仮言的推理と選言的推理が、ヘーゲルがするようにピラミッドの頂点に置かれるなら、実際の応用においてそれらの大きな意義を証明してもらいたいという要求が起こるが、どこでそのような要求は満たされることになるのか。⁽¹⁰⁾

これらの批判のうち、まず類比から定言的推理への転換に関しては、ヘーゲル自身類比の推理の欠陥が、その媒辞が具体的なものと普遍的なものとの直接的統一であることに探り、この欠陥の克服が、問題となる規定性とその帰属主体の本性が特殊性かの決定にあることを指摘している点に答えを見出すことができる。実際挙げられていた例で言えば、地球が住民をもつのは、その本性(天体という普遍性)によってではなく、空気や水の存在、温度の適切さなどの特殊性によってである。こうした内容を組み入れた媒辞があれば、それは「種的なもの」(GW12.120)として完全推理となるが、こうした媒辞から成る推理こそ定言的推理である。このような意味において、類比の推理の不完全性が克服されるためには定言的推理へと転換されなければならないのであり、トレンデレンブルクの批判は失当である。

次にヘーゲルの仮言的推理に関するトレンデレンブルクの批判は、定言的推理を推理の基本形式と評価する伝統的立場からなされるもので、トレンデレンブルクの仮言的推理の理解そのものから問題にされなければならない。右にみたように、トレンデレンブルクは仮言的推理によって表現されるものを個別が普遍に内属することの抽象的表現とする。たしかに形式論理学における仮言的三段論法は、ヘーゲルの仮言的推理を「もしSがAならば、PはBなり。SはAなり。故にPはBなり」と書き換えるから、ここで表明されているのは、思考による個別の普遍への内属関係となる。すなわち、AとBは主語―述語関係において捉えられているのである。これに対してヘーゲルの仮言的推理そのものが表明しているのは、存在としてのAとBであり、両者が原因―結果あるいは根拠―帰結などの必然的關係ないしは制約―被制約関係にあることである。ここでは推理は存在論的關係として捉えられているのであって、トレンデレンブルクがいうような内属関係として規定されているのではない。そしてまたそのかぎり、定言的推理が実体―属性関係という存在論的關係の表現であっても、同時に内属―包摂関係としても表現されたとはいえない。それはちがうのである。

同じ事情が選言的推理に関しても妥当する。伝統的論理学における選言推理では、大前提は選言的判断であり、小前提においてその選言肢のいずれかを肯定または否定して、結論が定言判断もしくは選言判断をなすような三段論法である。ここでも三段論法の選言肢は選択ないしは排斥を通じた包摂関係においてとらえられ、選択肢相互の關係は単純な同位的排他關係にすぎない。しかるにヘーゲルの選言的推理においてAは普遍として類の実体的同一性として、種としての特殊性B、C、Dを含むもの、すなわち、「AはBであるとともにCでもあり、DでもあるA」(GW12.124)でありつつ、B、C、Dに区別された在り方をする。したがって選言の推理として表現される形式は、伝統的形式に対応する部分にすぎないのであって、このかぎり、ヘーゲルの選言的推理を定言的推理に還元することはできないのである。

また選言的推理が表明するものが、普遍が生きた実体として自分を特殊として多様に展開しながら、同時にその特殊を現実的な個別として限定して自己の有機的統一性を確立する主体としての運動であるという存在論的内容であるかぎり、そこに「媒介するものと媒介されるものの同一性」という内容が仮言的推理同様に含まれているとは言え、仮言的推理における媒介・被媒介の同一性が二項間に限定されているのに対して、選言的推理におけるそれは、一者と存在するもの総体との間、存在するもの総体相互の間に成立する事態と考えられる限り、仮言的推理と選言的推理は、異別の形態なのである。言うなれば、仮言的推理が機械的もしくは化学的關係の基礎にある推理であるの

に対して、選言的推理は有機体的関係の基礎を成すものである。以上の意味においてトレンデレンブルクのヘーゲル批判は斥けられなければならない。

五 ヘーゲル推理論の特質と意義

トレンデレンブルクはヘーゲルの推理論に批判的見解を対置した後、最終的に自らのヘーゲル批判の要点を次のように再確認している。「我々に押し寄せてきた疑念をとりまとめてみよう。そうした場合、提示された質的推理はその諸形態もろとも廃止される。推理そのものは普遍的なものから始まり、したがってすでに直接性から離れているからである。その場合、質的推理は全体性の推理のうちに流れ込み、全体性の推理はまた定言的推理のうちに流れ込む。全体性は内的普遍性の外的表現にすぎないからである。帰納と類比は全体性の推理の諸格とは把握されえず、仮言的、選言的推理そのものにはいかなる大きな完成はない。そのほか移行は空虚である」。

ここには、伝統的な定言的三段論法を推理の基本とし、それを基準として構成される諸形態によって確固たる論証の世界が構築可能であるとする牢固とした信念が表白されている。ヘーゲルが抑々問題にしたのは、こうした信念の不毛性であった。それに対する批判としてヘーゲル推理論の特質がでさる。アリストテレスに始まる論証の妥当性が、包摂―内属という観点からする主観的思考形式の整合性に帰着させられるかぎり、論証が客観的世界に関わることも、客観的世界の構造解明に関わることもなくなる。ヘーゲルが何よりも欲したのは、客観的世界に具わる論理構造を説明することであり、彼はその原理を「概念」として定式化した。概念そのものは、その契機としての普遍性、特殊性、個別性に分化しつつ、自己内反省としてそれらの動的統一性を有するものと把握されている。ヘーゲルにおいて認識の活動とはこの概念の活動を把握することを意味し、その手段となるものとして主観的思考の論理形式が捉えられている。彼が論理学を「世界の知的解釈の純粹形態」と規定したことのうちにはこのような立場が込められていた。したがってヘーゲルの推理形式の展開は、まずいわば客観的理性の对象的存立規定を提示した後、既成の論理学の枠組を用いて、どれだけそれに接近できるかという形で、既成推理形態の能力を吟味する仕方での展開がなされている。したがって定在の推理なり、反省の推理なりの展開を認識活動の深化・発展の叙述とみることはできても、それ自身を改造されたヘーゲル固有の推理形式としてみることはできない。そのかぎり形式論理学の推理形式のうちにヘー

ゲルが弁証法的展開を認めているとみるクローンの視点は斥けられなければならない。ともかく対象的世界の存在論的規定を確定し、主観的論理形式の展開をもって対象的世界の認識過程とみなすところに、ヘーゲル推理論の特質をみることができる。

ではそうした推理論の展開にはどのような意義が認められるのか。ここでは三点に限って挙げてみよう。

第一の意義は、推理もまた伝統的論理学の形態では、真なる論証の機関ではないことを明らかにしたことである。ヘーゲルは既成論理学の推理が主観的なものにすぎないことを次のように言う。「推理の諸形式およびいわゆる格をはじめて主観的な意味において考察し記述したのは、アリストテレスである」(E §183 Zusatz TW8.336)。ヘーゲルはアリストテレスの哲学全体を主観的と捉えるのではないが、推理論を含む論理学に関しては主観的な考察にすぎず、したがって悟性推理の諸形式、有限な思维の諸形式しかとりあげていないことを批判している。推理が主観的な意味においてしか考察されていないことは、推理によって客観そのものが把握されないだけでなく、それによって展開される内容も相対的にとどまるということを意味する。実際アリストテレスが依拠する前提が帰納によって導出されていたかぎり、その推理およびそれに依拠する論証法が厳密さを最初から欠如していたことは否定できない。ヘーゲルはそうした事態を明らかにしたのであって、そのかぎりヘーゲルの形式論理学批判は妥当性を有する。

ヘーゲルの既成推理論に対する批判の第二の意義は、既成推理論に依拠して展開された経験科学の問題性をも明白ならしめたことである。経験科学の依拠する推理が「反省の推理」において展開された三つの形態であることは容易に理解しうる。しかるに全称推理が帰納推理に依存し、帰納推理が類比推理に依存するかぎり、経験科学は厳密科学たりえないことをヘーゲルは明らかにした。たしかに一方では類比推理が発見的機能を担っていることをヘーゲルは見逃さず、正当な評価を与えている。だがもう一方において彼が主語のもつ規定性を本性上のものか特殊性によるものか確定する必要があることを説いたことは、彼がこうした手続き抜きに立てられる主張が科学の分野には多く、実験による検証や反証と称されるものといえども、こうした要件を必ずしも満たしてはいないことを物語っている。実際ヘーゲルがどのような具体的事例を知っていたか詳かにしないが、現在認められているそうした類のものとして一六六三年にパスカルによって報告された水力学の実験、すなわち、大腿の上に吸い玉を乗せたまま水中二十フィートのところに人が長期間座っていないかならない流体静力学の実験がある。⁽³⁾ 単なる思考実験が、実際の実験にすり替えられたり、特定の結果だけを帰結させるために実験が行なわ

れる場合があるかぎり、そこでは類比の推理の悲しき側面が正当化されているのである。

ヘーゲルの推理論の第三の意義は、厳密な基礎づけがなされていないにせよ、客観的理性の存在を前提して、その自己展開過程として推理形態を存在論化したことが、一つの発見的意義を持ちえているということである。客観の自己生成的自己開示として推理形態を展開する形で、ヘーゲルは、旧来の視点とは異なる推理諸形式の分類を試みることになり、それがトレンデレンブルクによって無用の体系化とみなされようとも、形式論理学の妥当性の限界を明示するにいたっていることは、改めて確認するまでもない。そしてまたヘーゲルが生成的客体の展開過程として推理諸形式を体系化しようと試みたことのうちに、現実を静止的固定的なものと捉えるのではなく、むしろ自己否定的動的主体性を具えたものと捉え、その論理化への着手が認められるのである。このような意味においてヘーゲルの推理論は、存在論的論理学の一試行形態としての意味を有しているのである。

むすびにかえて

ヘーゲルの推理論において、彼固有の推理論と言えるものは、必然性の推理のみと言える。しかし、その展開内容が、既成推理論を前提してそこから直ちに導き出さるものとして、説得的なものであると言えるかは疑問の余地がある。そのかぎり、ヘーゲルの論理学の改作は誰の目から見ても成功している、と言いうるものではない。しかし、ヘーゲルが推理論として展開した概念の自己展開過程を世界の自己媒介的生成的過程とし捉え返すなら、改めてヘーゲルの世界了解が検討対象となる。何故なら、ニコライ・ハルトマンも言うように、ヘーゲルにおいては「絶対者は世界の背後に立つのではなく、世界そのものである。世界は絶対者の実現の過程である」⁽²⁾からである。この意味において、ヘーゲルの推理論の検討は、彼の世界了解解明の予備的作業という意味を有していたのである。

注

以下括弧内の略符号はそれぞれ次の使用テキストを表わし、後続する数字で巻数および頁数を示す。

GW=Georg Wilhelm Friedrich Hegel *Gesammelte Werke*, in *Verbindung mit der Deutschen Forschungsgemeinschaft*, Herausgegeben von der Rheinisch-Westfälischen Akademie der Wissenschaften, Hamburg 1964 ff.

YW=G. W. F. Hegel *Werke* in zwanzig Bänden, *Theorie Werkausgabe*, Herausgegeben von E. Moldenhauer und K. M. Michel, Frankfurt am Main 1970.
 注' Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften in Grundrisse 210-212a' 212b-213a' 213b-214a' 214b-215a' 215b-216a' 216b-217a' 217b-218a' 218b-219a' 219b-220a' 220b-221a' 221b-222a' 222b-223a' 223b-224a' 224b-225a' 225b-226a' 226b-227a' 227b-228a' 228b-229a' 229b-230a' 230b-231a' 231b-232a' 232b-233a' 233b-234a' 234b-235a' 235b-236a' 236b-237a' 237b-238a' 238b-239a' 239b-240a' 240b-241a' 241b-242a' 242b-243a' 243b-244a' 244b-245a' 245b-246a' 246b-247a' 247b-248a' 248b-249a' 249b-250a' 250b-251a' 251b-252a' 252b-253a' 253b-254a' 254b-255a' 255b-256a' 256b-257a' 257b-258a' 258b-259a' 259b-260a' 260b-261a' 261b-262a' 262b-263a' 263b-264a' 264b-265a' 265b-266a' 266b-267a' 267b-268a' 268b-269a' 269b-270a' 270b-271a' 271b-272a' 272b-273a' 273b-274a' 274b-275a' 275b-276a' 276b-277a' 277b-278a' 278b-279a' 279b-280a' 280b-281a' 281b-282a' 282b-283a' 283b-284a' 284b-285a' 285b-286a' 286b-287a' 287b-288a' 288b-289a' 289b-290a' 290b-291a' 291b-292a' 292b-293a' 293b-294a' 294b-295a' 295b-296a' 296b-297a' 297b-298a' 298b-299a' 299b-300a' 300b-301a' 301b-302a' 302b-303a' 303b-304a' 304b-305a' 305b-306a' 306b-307a' 307b-308a' 308b-309a' 309b-310a' 310b-311a' 311b-312a' 312b-313a' 313b-314a' 314b-315a' 315b-316a' 316b-317a' 317b-318a' 318b-319a' 319b-320a' 320b-321a' 321b-322a' 322b-323a' 323b-324a' 324b-325a' 325b-326a' 326b-327a' 327b-328a' 328b-329a' 329b-330a' 330b-331a' 331b-332a' 332b-333a' 333b-334a' 334b-335a' 335b-336a' 336b-337a' 337b-338a' 338b-339a' 339b-340a' 340b-341a' 341b-342a' 342b-343a' 343b-344a' 344b-345a' 345b-346a' 346b-347a' 347b-348a' 348b-349a' 349b-350a' 350b-351a' 351b-352a' 352b-353a' 353b-354a' 354b-355a' 355b-356a' 356b-357a' 357b-358a' 358b-359a' 359b-360a' 360b-361a' 361b-362a' 362b-363a' 363b-364a' 364b-365a' 365b-366a' 366b-367a' 367b-368a' 368b-369a' 369b-370a' 370b-371a' 371b-372a' 372b-373a' 373b-374a' 374b-375a' 375b-376a' 376b-377a' 377b-378a' 378b-379a' 379b-380a' 380b-381a' 381b-382a' 382b-383a' 383b-384a' 384b-385a' 385b-386a' 386b-387a' 387b-388a' 388b-389a' 389b-390a' 390b-391a' 391b-392a' 392b-393a' 393b-394a' 394b-395a' 395b-396a' 396b-397a' 397b-398a' 398b-399a' 399b-400a' 400b-401a' 401b-402a' 402b-403a' 403b-404a' 404b-405a' 405b-406a' 406b-407a' 407b-408a' 408b-409a' 409b-410a' 410b-411a' 411b-412a' 412b-413a' 413b-414a' 414b-415a' 415b-416a' 416b-417a' 417b-418a' 418b-419a' 419b-420a' 420b-421a' 421b-422a' 422b-423a' 423b-424a' 424b-425a' 425b-426a' 426b-427a' 427b-428a' 428b-429a' 429b-430a' 430b-431a' 431b-432a' 432b-433a' 433b-434a' 434b-435a' 435b-436a' 436b-437a' 437b-438a' 438b-439a' 439b-440a' 440b-441a' 441b-442a' 442b-443a' 443b-444a' 444b-445a' 445b-446a' 446b-447a' 447b-448a' 448b-449a' 449b-450a' 450b-451a' 451b-452a' 452b-453a' 453b-454a' 454b-455a' 455b-456a' 456b-457a' 457b-458a' 458b-459a' 459b-460a' 460b-461a' 461b-462a' 462b-463a' 463b-464a' 464b-465a' 465b-466a' 466b-467a' 467b-468a' 468b-469a' 469b-470a' 470b-471a' 471b-472a' 472b-473a' 473b-474a' 474b-475a' 475b-476a' 476b-477a' 477b-478a' 478b-479a' 479b-480a' 480b-481a' 481b-482a' 482b-483a' 483b-484a' 484b-485a' 485b-486a' 486b-487a' 487b-488a' 488b-489a' 489b-490a' 490b-491a' 491b-492a' 492b-493a' 493b-494a' 494b-495a' 495b-496a' 496b-497a' 497b-498a' 498b-499a' 499b-500a' 500b-501a' 501b-502a' 502b-503a' 503b-504a' 504b-505a' 505b-506a' 506b-507a' 507b-508a' 508b-509a' 509b-510a' 510b-511a' 511b-512a' 512b-513a' 513b-514a' 514b-515a' 515b-516a' 516b-517a' 517b-518a' 518b-519a' 519b-520a' 520b-521a' 521b-522a' 522b-523a' 523b-524a' 524b-525a' 525b-526a' 526b-527a' 527b-528a' 528b-529a' 529b-530a' 530b-531a' 531b-532a' 532b-533a' 533b-534a' 534b-535a' 535b-536a' 536b-537a' 537b-538a' 538b-539a' 539b-540a' 540b-541a' 541b-542a' 542b-543a' 543b-544a' 544b-545a' 545b-546a' 546b-547a' 547b-548a' 548b-549a' 549b-550a' 550b-551a' 551b-552a' 552b-553a' 553b-554a' 554b-555a' 555b-556a' 556b-557a' 557b-558a' 558b-559a' 559b-560a' 560b-561a' 561b-562a' 562b-563a' 563b-564a' 564b-565a' 565b-566a' 566b-567a' 567b-568a' 568b-569a' 569b-570a' 570b-571a' 571b-572a' 572b-573a' 573b-574a' 574b-575a' 575b-576a' 576b-577a' 577b-578a' 578b-579a' 579b-580a' 580b-581a' 581b-582a' 582b-583a' 583b-584a' 584b-585a' 585b-586a' 586b-587a' 587b-588a' 588b-589a' 589b-590a' 590b-591a' 591b-592a' 592b-593a' 593b-594a' 594b-595a' 595b-596a' 596b-597a' 597b-598a' 598b-599a' 599b-600a' 600b-601a' 601b-602a' 602b-603a' 603b-604a' 604b-605a' 605b-606a' 606b-607a' 607b-608a' 608b-609a' 609b-610a' 610b-611a' 611b-612a' 612b-613a' 613b-614a' 614b-615a' 615b-616a' 616b-617a' 617b-618a' 618b-619a' 619b-620a' 620b-621a' 621b-622a' 622b-623a' 623b-624a' 624b-625a' 625b-626a' 626b-627a' 627b-628a' 628b-629a' 629b-630a' 630b-631a' 631b-632a' 632b-633a' 633b-634a' 634b-635a' 635b-636a' 636b-637a' 637b-638a' 638b-639a' 639b-640a' 640b-641a' 641b-642a' 642b-643a' 643b-644a' 644b-645a' 645b-646a' 646b-647a' 647b-648a' 648b-649a' 649b-650a' 650b-651a' 651b-652a' 652b-653a' 653b-654a' 654b-655a' 655b-656a' 656b-657a' 657b-658a' 658b-659a' 659b-660a' 660b-661a' 661b-662a' 662b-663a' 663b-664a' 664b-665a' 665b-666a' 666b-667a' 667b-668a' 668b-669a' 669b-670a' 670b-671a' 671b-672a' 672b-673a' 673b-674a' 674b-675a' 675b-676a' 676b-677a' 677b-678a' 678b-679a' 679b-680a' 680b-681a' 681b-682a' 682b-683a' 683b-684a' 684b-685a' 685b-686a' 686b-687a' 687b-688a' 688b-689a' 689b-690a' 690b-691a' 691b-692a' 692b-693a' 693b-694a' 694b-695a' 695b-696a' 696b-697a' 697b-698a' 698b-699a' 699b-700a' 700b-701a' 701b-702a' 702b-703a' 703b-704a' 704b-705a' 705b-706a' 706b-707a' 707b-708a' 708b-709a' 709b-710a' 710b-711a' 711b-712a' 712b-713a' 713b-714a' 714b-715a' 715b-716a' 716b-717a' 717b-718a' 718b-719a' 719b-720a' 720b-721a' 721b-722a' 722b-723a' 723b-724a' 724b-725a' 725b-726a' 726b-727a' 727b-728a' 728b-729a' 729b-730a' 730b-731a' 731b-732a' 732b-733a' 733b-734a' 734b-735a' 735b-736a' 736b-737a' 737b-738a' 738b-739a' 739b-740a' 740b-741a' 741b-742a' 742b-743a' 743b-744a' 744b-745a' 745b-746a' 746b-747a' 747b-748a' 748b-749a' 749b-750a' 750b-751a' 751b-752a' 752b-753a' 753b-754a' 754b-755a' 755b-756a' 756b-757a' 757b-758a' 758b-759a' 759b-760a' 760b-761a' 761b-762a' 762b-763a' 763b-764a' 764b-765a' 765b-766a' 766b-767a' 767b-768a' 768b-769a' 769b-770a' 770b-771a' 771b-772a' 772b-773a' 773b-774a' 774b-775a' 775b-776a' 776b-777a' 777b-778a' 778b-779a' 779b-780a' 780b-781a' 781b-782a' 782b-783a' 783b-784a' 784b-785a' 785b-786a' 786b-787a' 787b-788a' 788b-789a' 789b-790a' 790b-791a' 791b-792a' 792b-793a' 793b-794a' 794b-795a' 795b-796a' 796b-797a' 797b-798a' 798b-799a' 799b-800a' 800b-801a' 801b-802a' 802b-803a' 803b-804a' 804b-805a' 805b-806a' 806b-807a' 807b-808a' 808b-809a' 809b-810a' 810b-811a' 811b-812a' 812b-813a' 813b-814a' 814b-815a' 815b-816a' 816b-817a' 817b-818a' 818b-819a' 819b-820a' 820b-821a' 821b-822a' 822b-823a' 823b-824a' 824b-825a' 825b-826a' 826b-827a' 827b-828a' 828b-829a' 829b-830a' 830b-831a' 831b-832a' 832b-833a' 833b-834a' 834b-835a' 835b-836a' 836b-837a' 837b-838a' 838b-839a' 839b-840a' 840b-841a' 841b-842a' 842b-843a' 843b-844a' 844b-845a' 845b-846a' 846b-847a' 847b-848a' 848b-849a' 849b-850a' 850b-851a' 851b-852a' 852b-853a' 853b-854a' 854b-855a' 855b-856a' 856b-857a' 857b-858a' 858b-859a' 859b-860a' 860b-861a' 861b-862a' 862b-863a' 863b-864a' 864b-865a' 865b-866a' 866b-867a' 867b-868a' 868b-869a' 869b-870a' 870b-871a' 871b-872a' 872b-873a' 873b-874a' 874b-875a' 875b-876a' 876b-877a' 877b-878a' 878b-879a' 879b-880a' 880b-881a' 881b-882a' 882b-883a' 883b-884a' 884b-885a' 885b-886a' 886b-887a' 887b-888a' 888b-889a' 889b-890a' 890b-891a' 891b-892a' 892b-893a' 893b-894a' 894b-895a' 895b-896a' 896b-897a' 897b-898a' 898b-899a' 899b-900a' 900b-901a' 901b-902a' 902b-903a' 903b-904a' 904b-905a' 905b-906a' 906b-907a' 907b-908a' 908b-909a' 909b-910a' 910b-911a' 911b-912a' 912b-913a' 913b-914a' 914b-915a' 915b-916a' 916b-917a' 917b-918a' 918b-919a' 919b-920a' 920b-921a' 921b-922a' 922b-923a' 923b-924a' 924b-925a' 925b-926a' 926b-927a' 927b-928a' 928b-929a' 929b-930a' 930b-931a' 931b-932a' 932b-933a' 933b-934a' 934b-935a' 935b-936a' 936b-937a' 937b-938a' 938b-939a' 939b-940a' 940b-941a' 941b-942a' 942b-943a' 943b-944a' 944b-945a' 945b-946a' 946b-947a' 947b-948a' 948b-949a' 949b-950a' 950b-951a' 951b-952a' 952b-953a' 953b-954a' 954b-955a' 955b-956a' 956b-957a' 957b-958a' 958b-959a' 959b-960a' 960b-961a' 961b-962a' 962b-963a' 963b-964a' 964b-965a' 965b-966a' 966b-967a' 967b-968a' 968b-969a' 969b-970a' 970b-971a' 971b-972a' 972b-973a' 973b-974a' 974b-975a' 975b-976a' 976b-977a' 977b-978a' 978b-979a' 979b-980a' 980b-981a' 981b-982a' 982b-983a' 983b-984a' 984b-985a' 985b-986a' 986b-987a' 987b-988a' 988b-989a' 989b-990a' 990b-991a' 991b-992a' 992b-993a' 993b-994a' 994b-995a' 995b-996a' 996b-997a' 997b-998a' 998b-999a' 999b-1000a' 1000b-1001a' 1001b-1002a' 1002b-1003a' 1003b-1004a' 1004b-1005a' 1005b-1006a' 1006b-1007a' 1007b-1008a' 1008b-1009a' 1009b-1010a' 1010b-1011a' 1011b-1012a' 1012b-1013a' 1013b-1014a' 1014b-1015a' 1015b-1016a' 1016b-1017a' 1017b-1018a' 1018b-1019a' 1019b-1020a' 1020b-1021a' 1021b-1022a' 1022b-1023a' 1023b-1024a' 1024b-1025a' 1025b-1026a' 1026b-1027a' 1027b-1028a' 1028b-1029a' 1029b-1030a' 1030b-1031a' 1031b-1032a' 1032b-1033a' 1033b-1034a' 1034b-1035a' 1035b-1036a' 1036b-1037a' 1037b-1038a' 1038b-1039a' 1039b-1040a' 1040b-1041a' 1041b-1042a' 1042b-1043a' 1043b-1044a' 1044b-1045a' 1045b-1046a' 1046b-1047a' 1047b-1048a' 1048b-1049a' 1049b-1050a' 1050b-1051a' 1051b-1052a' 1052b-1053a' 1053b-1054a' 1054b-1055a' 1055b-1056a' 1056b-1057a' 1057b-1058a' 1058b-1059a' 1059b-1060a' 1060b-1061a' 1061b-1062a' 1062b-1063a' 1063b-1064a' 1064b-1065a' 1065b-1066a' 1066b-1067a' 1067b-1068a' 1068b-1069a' 1069b-1070a' 1070b-1071a' 1071b-1072a' 1072b-1073a' 1073b-1074a' 1074b-1075a' 1075b-1076a' 1076b-1077a' 1077b-1078a' 1078b-1079a' 1079b-1080a' 1080b-1081a' 1081b-1082a' 1082b-1083a' 1083b-1084a' 1084b-1085a' 1085b-1086a' 1086b-1087a' 1087b-1088a' 1088b-1089a' 1089b-1090a' 1090b-1091a' 1091b-1092a' 1092b-1093a' 1093b-1094a' 1094b-1095a' 1095b-1096a' 1096b-1097a' 1097b-1098a' 1098b-1099a' 1099b-1100a' 1100b-1101a' 1101b-1102a' 1102b-1103a' 1103b-1104a' 1104b-1105a' 1105b-1106a' 1106b-1107a' 1107b-1108a' 1108b-1109a' 1109b-1110a' 1110b-1111a' 1111b-1112a' 1112b-1113a' 1113b-1114a' 1114b-1115a' 1115b-1116a' 1116b-1117a' 1117b-1118a' 1118b-1119a' 1119b-1120a' 1120b-1121a' 1121b-1122a' 1122b-1123a' 1123b-1124a' 1124b-1125a' 1125b-1126a' 1126b-1127a' 1127b-1128a' 1128b-1129a' 1129b-1130a' 1130b-1131a' 1131b-1132a' 1132b-1133a' 1133b-1134a' 1134b-1135a' 1135b-1136a' 1136b-1137a' 1137b-1138a' 1138b-1139a' 1139b-1140a' 1140b-1141a' 1141b-1142a' 1142b-1143a' 1143b-1144a' 1144b-1145a' 1145b-1146a' 1146b-1147a' 1147b-1148a' 1148b-1149a' 1149b-1150a' 1150b-1151a' 1151b-1152a' 1152b-1153a' 1153b-1154a' 1154b-1155a' 1155b-1156a' 1156b-1157a' 1157b-1158a' 1158b-1159a' 1159b-1160a' 1160b-1161a' 1161b-1162a' 1162b-1163a' 1163b-1164a' 1164b-1165a' 1165b-1166a' 1166b-1167a' 1167b-1168a' 1168b-1169a' 1169b-1170a' 1170b-1171a' 1171b-1172a' 1172b-1173a' 1173b-1174a' 1174b-1175a' 1175b-1176a' 1176b-1177a' 1177b-1178a' 1178b-1179a' 1179b-1180a' 1180b-1181a' 1181b-1182a' 1182b-1183a' 1183b-1184a' 1184b-1185a' 1185b-1186a' 1186b-1187a' 1187b-1188a' 1188b-1189a' 1189b-1190a' 1190b-1191a' 1191b-1192a' 1192b-1193a' 1193b-1194a' 1194b-1195a' 1195b-1196a' 1196b-1197a' 1197b-1198a' 1198b-1199a' 1199b-1200a' 1200b-1201a' 1201b-1202a' 1202b-1203a' 1203b-1204a' 1204b-1205a' 1205b-1206a' 1206b-1207a' 1207b-1208a' 1208b-1209a' 1209b-1210a' 1210b-1211a' 1211b-1212a' 1212b-1213a' 1213b-1214a' 1214b-1215a' 1215b-1216a' 1216b-1217a' 1217b-1218a' 1218b-1219a' 1219b-1220a' 1220b-1221a' 1221b-1222a' 1222b-1223a' 1223b-1224a' 1224b-1225a' 1225b-1226a' 1226b-1227a' 1227b-1228a' 1228b-1229a' 1229b-1230a' 1230b-1231a' 1231b-1232a' 1232b-1233a' 1233b-1234a' 1234b-1235a' 1235b-1236a' 1236b-1237a' 1237b-1238a' 1238b-1239a' 1239b-1240a' 1240b-1241a' 1241b-1242a' 1242b-1243a' 1243b-1244a' 1244b-1245a' 1245b-1246a' 1246b-1247a' 1247b-1248a' 1248b-1249a' 1249b-1250a' 1250b-1251a' 1251b-1252a' 1252b-1253a' 1253b-1254a' 125

- (19) Vgl. *ibid.*, S. 368f.
- (20) Aristoteles, *Analy. post.*, 100b.
- (21) Vgl. *ibid.*, 71b.
- (22) 近藤洋逸・好並英司著『論理学入門』岩波全書、一九七九年、一四七頁。
- (23) Vgl. Trendelenburg, *op. cit.*, S. 369f.
- (24) Vgl. *ibid.*, S. 370ff.
- (25) Vgl. *ibid.*, S. 372ff.
- (26) Vgl. Aristoteles, *Analy. post.*, 100b.
- (27) Vgl. G. W. F. Hegel, *Vorlesungen über Logik und Metaphysik*. Heidegger 1817. Mitgeschrieben von F. A. Good. Herausgegeben von K. Gloy, Hamburg 1992, S. 163.
- (28) Vgl. I. Kant, *Kritik der reinen Vernunft*, Herausgegeben von R. Schmidt, Hamburg 1968, [A70, B95], [A80, B106].
- (29) Vgl. Trendelenburg, *op. cit.*, S. 375ff.
- (30) Vgl. *ibid.*, S. 376f.
- (31) Vgl. *ibid.*, S. 377f.
- (32) *Ibid.*, S. 378.
- (33) Cf. S. Shapin, *A Social History of Truth. Civility and Science in Seventeenth-Century England*, Chicago 1994, p. 339.
- (34) N. Hartmann, *Die Philosophie des Deutschen Idealismus*, 3 Aufl. Berlin 1974, S. 469.

Der ontologische Gesichtspunkt und Aufbau der Hegelschen Schlußlehre

Kiichirō TAKEMURA

ヘーゲル推理論の存在論的視角と構造

Hegles „wissenschaft der Logik“ hat den Sinn, die reine Gestalt der Intellektualansicht der Welt zu sein. Auf diesem Gesichtspunkt bezweckt der vorliegend Aufsatz die Eigentümlichkeiten und die Bedeutungen seiner Schlußlehre zu beleuchten.

Die erste Eigentümlichkeit der Hegelschen Schlußlehre besteht darin, daß Hegel den Schluß nicht als das, was Subjekt, die Prädikat und die Mitte ausmachen, wie in der traditionellen Logik, sondern als die Zusammenhang von Begriffsmomente aufeinander, d.h. Allgemeinheit, Besonderheit und Einzelheit, auffaßt. Die zweite derselben liegt darin, daß der Schluß nicht als die subjektive Form des Denkens, wie in der klassischen Logik, sondern als die allem einwohnende Seinweise begriffen wird, wie Hegel sagt: „Alle Dinge sind der Schluß“. Die dritte Eigenheit der Schlußlehre Hegels ist, daß er behauptet, daß, während das Wesentliche des Schlusses in der Mitte sich befindet, der Schluß sich nicht vollendet, ohne daß die Mitte selbst die Einheit von Subjekt und Prädikat ist.

Auf dem obigen Standpunkt betrachtet Hegel die Formen der Schlüsse als Gegliedertes in den Schluß des Daseins, der Reflexion und der Notwendigkeit. Nach Hegel geschieht in der ersten Figur des Schlusses des Daseins die folgende Sachlage. (1) Das Einzelne schließt sich durch jeden andern Medius Terminus mit einem andern Allgemeinen zusammen. (2) Das Einzelne kann durch denselben Medius Terminus wieder mit mehreren allgemeinen zusammengeschlossen werden. Folglich müssen die Schlüsse, die dasselbe Subjekt betreffen, in den Widerspruch übergehen. Die zweite Figur kann keine Allgemeine Aussage sein, indem der Folgesatz derselben der partikuläre Satz wird. Die dritte Figur hat auch einen Mangel, keine positive Prädiktion vorzubringen, weil der Forgesatz derselben der Verneinende ist.

Was die Schlüsse der Reflexion betrifft, so weist Hegel darauf, daß der Schluß der Allheit, indem der Vordersatz desselben den Folgesatz voraussetzt, in den Zirkelschluß verfällt, daß der der Induktion, weil dieselbe eine Erfahrung als gültig annimmt, problematisch bleibt, und daß der der Analogie vermöge Quaternio terminorum unvollendet ist.

Hegel erkennt an, daß der Schluß der Notwendigkeit aus der Subjektivität kommt und erst objektiv wird. Besonders im disjunktiven Schluß, nach Hegel, vollendet sich „die Einheit des Vermittelnden und des Vermittelten“, und eine Unmittelbarkeit, ein Sein, kommt vor.

Als Bedeutung der Hegelschen Schlußlehre werden drei folgende angeführt.

- (1) Hegels Schlußlehre kundigt offen, daß die traditionelle Logik kein wahre Organon für Argumentation ist.
- (2) Sie macht auch offen, daß die Erfahrungswissenschaften als auf dem Schluß der Induktion beruhend nicht streng sind.
- (3) Hegels Auffassung vom Schluß hat einen heuristischen Charakter im Sinne, daß sie die dem Objektivem innewohnende Schlußform vorzulegen versucht.